

福西吉左衛門

稲田數馬之助

寺院白米山泉現寺は浄土宗若松徒町可山願成就寺乃末山なり、元禄元年の建築にして本尊弥陀客殿に安置し奉る。願成就寺は旧耶麻郡五目組加納莊上三宮村加納山願成寺の移しにて京都智恩院の末山也。

浄土四流の一多念義の元祖隆寛が願成寺の開基也。隆寛は栗田関白乃御胤少納言資隆乃三男にして、願成就寺を若松徒町に移したるは、慶長四年上杉景勝の命に依り、良翁を以て開山とす。寺領百石を賜わる。

堂宇、玉光堂は奉安置地藏菩薩の草創は、人皇五十一代平成天皇の御宇大同年中中徳溢大師の御作にて、(と云う)御尊躰長二尺八寸槽尾宗願の守本尊の由え伝う。天正年中葦名盛氏が本郷村羽黒山(岩崎山)に御居城の時、天俄に擡ぎ曇り、閃電轟突に凄まじき有様となれば、宗願其の運氣を考え天空を望み、沐浴斎戒し、荒々しく瑠璃の壺より薬を捧げ奉れば神忽然として現れ、童子と変じて一巻の書を宗願に授く、宗願則拜受して之を子孫に伝うとかや。其の後宗願一度瑠璃の壺を開けば四方の悪病忽ち去り尽ぬとかや、是則ち神力の然らしむる処にして寔う。尊かりけり次第ならばや、宗願故郷槽尾村に帰り死後郷人より薬師如来として祀られ水災難病を救わせ賜うと云う、宗願此地を去りし後は御堂も自然と淋しくなり、「天和三年」(寛永八年)の大洪水に玉光堂押流され、漸く菩薩の御尊躰のみ取揚げ奉り、十王は不残流され賜う。此時由来の書も流失せし由申伝う。夫れより寛永七年(正徳元年)迄は端村宗願町の民家に安置し、正徳元年に至り当村肝煎小池喜惣兵衛義徳と云う者、泉現寺客殿に移し奉るとかや。其後義徳七代乃裔小池彦次郎(後喜八郎と改名す)栄詮と云う者、当時の住職善秀和尚と謀り、壇中の褒善家 宇兵衛、利兵衛 与惣兵衛 彦右衛門等と協力し、村呂乃志を一にして安永九庚年御堂の再建を泉現寺境内に経営し、地藏菩薩乃御尊躰を茲に移し奉る。今の御堂は即ち是なり。泉現寺の大門や、塀墻も此時

同時に建設したるものにして誠可謂霊場矣

右は古文書や俚俗の伝承を採りて掲記したる事なれば、或は被是低括するものなりと雖も弁を訂正せば却て其の実を失ふ嫌なき能ざるを以て、其の伝ふる俣を書き記したる事爾云。

大正五丙辰七月宇羅盆会にして之を撰す。

撰者 小池筑後守添貞道拾八代之主 小池徳美
筆者 撰者之二弟河沼郡千咲之任人 同道康

實次

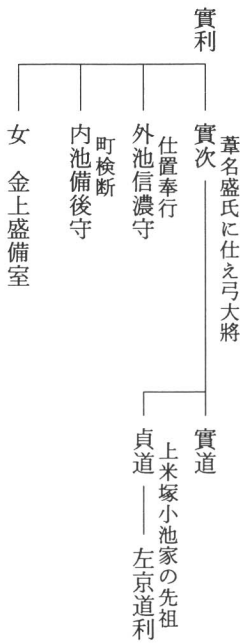
修理之介と号す武田家滅亡後会津に來たり葦名盛氏に仕え弓大將となり老万五阡石を賜ふ、葦名家滅亡後南山檜原郷に蟄居して再奉仕せず同所にて死す。今檜原郷に小池村と云所を存せしは實次の名跡なり

大永四年生 天正十六年没 歳六十八

貞道

小池修理之介實次の次男として蒲生氏に仕え代官を勤む後に上米塚村に來たり住す。これ米塚小池家の先祖とす

天文廿一年甲洲都留郡生れ、慶長四年己亥
年九月十三日没 四十八



外池信濃守

甲州小池郡に住して武田信玄に仕えた小池左近實利の次男武田滅亡後蒲生氏郷に仕え会津で八千石を賜う。蒲生忠郷之仕え仕置奉行を務めた。